

2016年度 キリスト教カウンセリング研究講演会報告



会場内の様子と香山リカ先生

2017年2月17日（金）、第1回キリスト教カウンセリング研究講演会が開催された。主催の総合研究所（カウンセリング研究）としては、すでに2003年からキリスト教カウンセリングに関連した講演会を行い、2008年までに合計12回を重ねている。今回の講演会はその流れを継ぐもので、いわば第二シリーズの初回にあたる。先の12回は毎回テーマを変え、日常の様々な問題を考えるものであったが、今回からは「メンタルヘルス」に絞り、それを多彩な講師を招きながら多角的に捉えていこうとするものである。また会場も従来の埼玉県内から都内に移し、開催時間帯も従来の午後から夜間に移し、参加者の利便をはかった。

このように今回の講演会は、様々な思いと意図を込めて企画されたが、その記念すべき第1回は、「現代人のメンタルを救うのは誰か ～医療、経済、宗教を考える」と題して、香山リカ先生に登壇していただいた。先生は精神科医として、社会病理学者として、また大学の教官として、幅広い活躍をされている方であり、一方できわめてキリスト教会に近い立ち位置をお持ちで、今回の講師に最適の方であった。当日はテーマや講師に呼応し、

88名の方々が参加してくださり、盛会となった。

講演は、東日本大震災から始まり、大切な人を喪った「悲しみ」に対して私たちは何ができるのだろうか、との問いかけがなされた。悲しむことの重要性とそれを乗り越えていくプロセスについて、フロイトから始まり、ポウルビ、キューブラロスの研究の紹介があった。死後生やお迎え現象といった話題を通して、祈りや天国・来世を求めている人が多くいること、反面、「宗教」となるとどうも忌避される傾向にあることも指摘された。

それでは「悲しみ」に対して精神医学は何ができるのだろうか、と講演後半の問いかけがなされた。阪神淡路大震災で子どもを亡くした母親たちの研究（「喪失体験と悲嘆」、医学書院）では、母親たちが、同情や励まし、そして専門家の介入を「してほしくなかったこと」としてあげていることが紹介された。また大きな悲しみのケアのあり方も変わり、「やるべきこと」が少なく、「やるべきでないこと」が多くなった。精神医学にできることは意外と少ないと結論づけられた。

講演はここから新たに展開する。先生は再度、宗教は忌避するが祈りや天国・来世を求めている人が多くいることを強調し、その結果、世界的に宗教を脱宗教化して、たとえば「マインドフルネス」ブームなどが起きていると分析された。そして脱宗教化した癒やし、能力開発、ヒーリングが本当に正しいのだろうか、と講演最後の問いかけをなされた。会場参加者は、悲しみも、メンタルヘルスも、そしてそのケアもサービスも、宗教が宗教として対応し、真の担い手となるべきことを考えさせられ、その余韻のなかで講演会は閉じられた。

（文責：藤掛 明 [ふじかけ・あきら] 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究研究代表・聖学院大学人間福祉学部こども心理学科准教授）